

# 初期ハーバーマスにおける戦後の理性と社会学

ブロッホ批判を手掛かりに

飯島祐介

## The Early Writings of Jürgen Habermas and Sociology as a Condition of Possibility for Reason in Post-war Society Focusing on his Critique of Ernst Bloch

IJIMA Yusuke

### Abstract

This paper explores why the early writings of Jürgen Habermas are based on sociology, focusing on his critique of Ernst Bloch. Habermas criticizes Bloch for his latent tendency to accept violence as a means of the realization of Utopia. However, he shares the Schelling's conceptualization of reason as regulated madness. The critique of Bloch has an aspect of the self-criticism. At this point, Habermas finds Bloch's natural philosophy behind his acceptance of violence. This philosophy leads to the rejection of the relative validity of Utopia in the historical social world. This rejection paves a way to sanctification of Utopia, which can result in acceptance of violence as a means of the realization of Utopia. The madness is, as it were, not sufficiently regulated in Bloch's thought owing to his natural philosophy. Habermas stresses the importance of accepting and confirming the relative validity of Utopia in the historical social world. In this confirmation, sociology is needed. For Habermas, the reason should be conceptualized as regulated madness in post-war society. The early writings of Habermas are based on sociology because it is a condition of possibility for reason in post-war society.

### 1. 初期ハーバーマスと社会学

なぜ初期ユルゲン・ハーバーマスは社会学に準拠するのか。これが本論の探求する問いである。この探求を通して、ようやく緒に就いたばかりと言える、初期ハーバーマス理論の解明に貢献することが目的となる。

『公共性の構造転換——市民社会の一カテゴリーについての探求』(1962年)と『理論と実

踐——社会哲学論集』(1963年)を中心とする1950年代から60年代のハーバーマスの理論展開——本稿では初期ハーバーマスとする——についての研究は、十分に蓄積されているとは言えない。『コミュニケーションの行為の理論』(1981年)の社会学理論が、さらに『事実性と妥当性』(1992年)の法・政治学理論が注目されるなかで、『公共性の構造転換』が一定の関心を集めるにとどまってきた。初期ハーバーマスは、アクチュアリティを喪失した、学説研究上の特殊な関心に対応した参照項として、理論的には関心の周縁へと放逐され、そのためにまた、学説研究においても後景に退いていた<sup>1</sup>。しかし、「戦後社会」の枠組み——ドイツ連邦共和国の場合では、たとえば、基本法上の「自由で民主的な基本秩序」の規定を基礎とするそれ——が、とくに1990年代以降のグローバル化の進展とともに問い直されるなかで<sup>2</sup>、その形成期に展開された初期ハーバーマス理論は、再びアクチュアリティを獲得しているように思われる<sup>3</sup>。本論は、こうした状況を踏まえて、初期ハーバーマス理論の解明に貢献することを目指すものである。

ハーバーマスは、『公共性の構造転換』では、少なくとも部分的には社会学に準拠している。しかし、彼の学問的営為の出発点となる、ボン大学に提出された博士論文は「絶対者と歴史——シェリング思想の内的分裂について」(1954年)であり、哲学に準拠していた。その後の展開でも、『コミュニケーションの行為の理論』で社会学へとさらに深く分け入った後は、『事実性と妥当性』で法学・政治学へと転回し、さらに近年では再び哲学へと向かっている。このように、ハーバーマスは社会学から出発したわけではないし、社会学を常にすでにベースにしているわけでもない。社会学に準拠することは、初期ハーバーマスにおける、ひとつの謎として浮上する。

この謎は、一見すると、ハーバーマス自身によってすでに解かれており、あらためて解明する必要はないように思われる。彼は「社会学の批判的および保守的課題」で、社会学それ自体について論じる(Habermas 1963b=1999)。そこでは、社会学が批判的であればならないことが、すなわち、所与の目的を実現する手段を提示する、技術的勧告にとどまらず、目的それ自体を提示する、実践的指針の提示へ進まなければならないことが主張される。それは、テクノクラートによる専制——「ハクスリーの悪魔」「オウエルの恐怖」等々と表現される——を回避するために要請される。そして、この要請は社会学にとって内在的であり、批判は社会学にとって伝統的課題であると説かれる。社会学にとって批判的課題は保守的課題であるとされる。

しかし、この議論は、上記の謎を解明するものではない。それは、社会学が実践的指針の提示に取り組みなければならないことを主張するにとどまる。したがって、そこでは、そもそもなぜ社会学に準拠するのかについては解明されない。社会学に準拠することは前提とされ、その理由は謎のままに残される。

本論は、ブロッホ批判を手掛かりに、この謎を解くことを試みる。『ユートピアの精神』(1918年)と『希望の原理』(1959年)の著者たるエルンスト・ブロッホはまさにユートピアを提示しようとする点で、実践的指針を提示しようとするハーバーマスと同一の方向性をとる。しかし、同時に、ブロッホは社会学には準拠しなかった点で、ハーバーマスと異なった方向へと展開する。このブロッホへの批判を参照することで、初期ハーバーマスが社会学に準拠する理由

が浮かび上がるのではないか、これが本論の方法論上の想定である。

以下ではまず、ハーバーマスがブロッホをユートピアを実現する手段として暴力を容認する傾向にあると厳しく批判していることを確認する(第2節)。次に、この批判が展開された地平として、オートメーションのディストピアの到来を予測する、実証主義批判を措定し、その内実を明らかにする(第3節)。実証主義批判を地平にブロッホ批判を読み直し、それはかえって決定的な点において立場——理性を「規制された狂気」としてシェリング的に概念化する——を共有するからこそ厳しくなっていることを明らかにする(第4節)。そのうえで、暴力を容認する傾向にあると批判したブロッホとの差異化において、社会学が必要とされることを明らかにする(第5節)。最後に、それまでの議論を踏まえて、初期ハーバーマスは、社会学が戦後的理性——国民社会主義への反省を踏まえて概念化されたそれ——の可能条件であるからこそ、それに準拠することを確認する(第6節)。

## 2. ハーバーマスのブロッホ批判

初期ハーバーマスは、たびたびブロッホに触れているが、まとまったかたちで論及しているのは、「マルクス主義的シェリング——エルンスト・ブロッホの思弁的な唯物論について」である。この論文は、1960年に『希望の原理』の書評(Rezension)としてメルクーア(Merkur)誌に掲載され、『理論と実践』(1963年)に付録として収録された。その後、『理論と実践』の新版が1971年に刊行された際に収録論文から外され<sup>4</sup>、『哲学的・政治的プロフィール』(1971年)に転載された。本論は、この論文を中心にブロッホ批判を再構成する。まずは、同論文が成立した時期における、ブロッホをめぐる、連邦共和国内の知的状況を簡潔に振り返ることにしたい<sup>5</sup>。

1938年以来アメリカへ亡命していたブロッホは、49年春にドイツに帰国し、ソビエト占領地区のライプチヒ大学で哲学正教授に就任する(好村 1986: 220)。同年に成立したドイツ民主共和国(DDR)にあって、ブロッホは希望を持って精力的に仕事に取り組む(好村 1986: 222)。しかし、1956年2月のソビエト連邦共産党第20回大会での第一書記フルシチョフによるいわゆるスターリン批判から同年10月に始まるハンガリー事件へと展開する情勢の中で、ブロッホの思想はドイツ社会主義統一党(SED)によって危険視され、57年には大学の強制的退職へと追い込まれる(好村 1986: 234)。自著の刊行が難しくなりながらも、DDRにとどまったブロッホではあったが、1961年8月に連邦共和国滞在中にベルリンの壁の建設の報に接すると、帰国しないことを決断し、同年11月にはチュービンゲン大学客員教授に就任する(好村 1986: 238)。76歳になっていた。

このときブロッホには連邦共和国内に足場がなかったわけではなかった。むしろ、それは亡命前から築かれつつあった。1958年に国際ヘーゲル協会の会議でフランクフルトに赴き、また60年にはチュービンゲン、ハイデルベルク、シュトゥットガルトで講演を行っていた(好村 1986: 336)。DDRで自著の刊行が難しくなっていたブロッホにとって、言わば救いの手となったのは、フランクフルトのゾーアカンブ書店であった(好村 1986: 237)。1955年に第二巻が

刊行されたものの第三巻は刊行されていなかった『希望の原理』を、ズーアカンプ書店は 59 年に刊行している。

しかし、この老哲学者を連邦共和国は、講演にせよ亡命にせよ、好意的に迎えたわけでは必ずしもなかった。チュービンゲン大学での最初の就任講演では、「聴衆の一部、とくにジャーナリズムや学者の意地悪い部分」は、「ブロッホが約束の国と信じた DDR から石をもて追われるように出てきて、ナチズムの過去を清算してないままに依然として大資本の利益に沿って危険な戦争挑発政策をとっているとして彼自身非難していた西ドイツに庇護を求めたことに対して、それ見たことかという冷笑的な態度を示し、ブロッホがどう自己弁明するかに興味を抱いていた」(好村 1986: 240)。また、ローマン・ヨースによると、テオドル・アドルノは、ズーアカンプ書店の創業者ペーター・ズーアカンプから依頼されたブロッホについての所見(1958年11月10日付)で、「結局のところは[ブロッホを——引用者注]勧めているが、すでに刊行されていた『希望の原理』第一巻・第二巻について、またブロッホの人柄について、軽蔑的な態度を示さずにはおれなかった」(Yos 2019: 452)のである。

ハーバーマスの「マルクス主義的シェリング」にも、ブロッホをめぐる、連邦共和国のこうした知的状況——思想への知的関心と、政治的立場やそれと分かち難く結びついている人柄への時にそれ自体政治的な反発が入り混じる——が刻印されている。それは、後述するようにブロッホの哲学的立場に踏み込みながら、同時に彼の政治的立場に対する厳しい批判をブロッホに差し向ける。ハーバーマスは、論文の終盤で、ユートピアの実現の手段において暴力を容認する傾向にあると、「レーニン主義」——暴力革命の不可避性を説いたレーニンが意識されると推定される——のレッテルを貼りながら批判する<sup>6</sup>。「ブロッホは、レーニン主義戦略と暴力とのあの親密な関係性に、ゴシックの扮装を与えているにすぎない」(Habermas 1963d: 348=1999: 528)<sup>7</sup>。その背景には、ユートピアの神聖化がある。「ここで、この思想はドイツ哲学の深淵な伝統と一致していると思うかもしれないが、「王国的なもの」や「秩序の本質」はただちに、失礼ながら全体主義的なものと接している、神聖化を享ける」(Habermas 1963d: 349=1999: 528)<sup>8</sup>。

希望の指し示すユートピアを神聖化し、その実現の手段として暴力を容認する傾向がある、こうした厳しい批判は、東西冷戦を背景としてそれ自体、たしかに政治性を帯びている。しかし、この批判を、たんなる政治的立場からの外在的批判と考えるわけにはいかない。とは言え、逆に、この批判をブロッホの思想にまったく内在した批判とすることもできない。シェリング論から出発したハーバーマスは、1950年代後半にマルクス主義への傾斜を深めていた。このハーバーマスが、ブロッホを「マルクス主義的シェリング」として再構成したとき、ハーバーマス自身の関心に相当に引き寄せられたブロッホ像が構成されている。それは、ハーバーマスが自身の理論を反省的に捉え直すための対照項となっている。この点で、このブロッホ像の偏りは小さくないと考えられるし、そこで展開される批判の妥当性は慎重に判断されなければならない<sup>9</sup>。しかし、本論としては、この批判の妥当性を問う必要はない。本論の目的は初期ハーバーマスが社会学に準拠する理由を明らかにすることにあり、そのかぎりではブロッホ批判を参照しているからである。ここでの本論の課題は、この批判を初期ハーバーマスに内在的に解釈す

ることである。そのためにはまず、「マルクス主義的シェリング」の解釈にとって適切な地平を措定し、その内実を明らかにしなければならない。

### 3. オートメーションのディストピア／規制されない狂気

前述したように、「マルクス主義的シェリング」は『理論と実践』に付録として収録された。この論文は本来、同書の巻頭論文「社会哲学との関連における古典的政治学」等で提示されている、「批判的社会学」を中核とする理論構想の理解を助けるものとして位置づけられていたと考えられる<sup>10</sup>。この理論構想の文脈は、同書が初出となる「独断論・理性・決断——科学化された文明における理論と実践のために」で主に説明されている（Habermas 1963c=1999）。そこで、本論は、「マルクス主義的シェリング」を解釈するための地平として、同論文を措定することにしたい<sup>11</sup>。

ハーバーマスは、「独断論・理性・決断」で、「技術的処理力 (technische Verfügungsgewalt)」の拡張としての合理化の先に、オートメーションのディストピアというべき状況の到来を予測する。ここで、「技術的処理力」の拡張＝合理化は、四段階に分けられる。第一段階は、目標の実現のために可能な合理的な行動の観点から、行動が選択される段階である（Habermas 1963c: 246=1999: 374）。第二段階は、第一段階の意味で同等に合理的な複数の行動の中から、「経済的」または「効率的」として規定される選択合理性の規準（Habermas 1963c: 247=1999: 375）にしたがって行動が選択される段階である。第三段階は、「敵 (Gegner)」が存在する「戦略的状況」が考慮に入れられ、「生き残ることの保障」が「基本価値」に導入され、それに準拠して行動が選択される段階である（Habermas 1963c: 248-9=377-8）。第四段階は、「決断のコストが機械に移され」（Habermas 1963c: 249=1999: 378）、決定が自動化される段階である。

ハーバーマスによると、第四段階は、なお「虚構」にとどまる。しかし、まったくの絵空事でもない。「これらの問い [「生き残る」ことに関わる様々な問い——引用者注] にサイバネティックに、まさしく「自分自身」で答える、自動学習装置を社会制御システムの中心に設置するならば、歴史を技術的に処理するという悪しきユートピアは実現されるだろう」（Habermas 1963d: 250=1999: 380）。ここで、「悪しきユートピア」とされるのは、「社会エンジニアと閉じられた施設の入居者という二つの階級へと人間が分割され意識が分裂する」からである（Habermas 1963c: 257=1999: 389）。

オートメーションのディストピアの到来という予測は、ハーバーマスに独自のものではなかった。1956年にフリードリヒ・ポロックが『オートメーション——その経済的・社会的諸帰結の評価のための資料』を刊行している（Pollock 1956）。ポロックは、同書について、「フランクフルト大学社会研究所が社会構造の変動について継続的に行っている諸研究に属し、研究所の研究協力者から多くのヒントをもらっている」（Pollock 1956: V）とする<sup>12</sup>。ポロックは、「自由な社会へのオートメーションの編入にあたって、長期的視野で、また新しい方法の助けをかりて計画された包括的なプログラムにしたがうことによって、第二次産業革命は理性的な社会秩序のペースメーカーになりうる」（Pollock 1956: 290）と結論づけている。しかし、その

前提にはかえって、「オートメーションの性急な導入の結果として拡がりうる社会的動揺によって、まだ存在しない補助手段を備えた、新しい専制に道が開かれる」(Pollock 1956: 284) 可能性が見据えられている。

オートメーションのディストピアの到来という予測は、フランクフルト大学社会研究所の周辺に限定されたものでもなかった。それはむしろ、ハンス・フライヤーやアルノルト・ゲーレン、そしてヘルムート・シェルスキー等の保守主義者として概括される論者を本拠地とし、いわゆる「文化批判 (Kulturkritik)」の伝統的トポスを背景としていた。この本拠地では、オートメーションへと至る技術の発展は、ディストピアの到来と、また合理化と、直線的に結ばれる傾向にあった。そのため、そこには合理化それ自体に抵抗する傾向が内包され、場合によっては非合理主義へと転落する危険が潜んでいた。かつて「文化批判」において「文明」に對置された「文化」が非合理主義に着色されたとき、この系譜に属する少なくない論者は国民社会主義に飲み込まれていった。ハーバーマスの博士論文の指導教員である、エーリヒ・ロータッカーもその一人であった。むろん、戦後の連邦共和国においてこの危険にナイーブではありえず、いきおい論調は諦念を通奏低音とせざるをえず、ユートピアへの展望は失われた。「戦後期における、フライヤー、ゲーレン、あるいはシェルスキーの保守主義は当初から、国民社会主義の完全な失敗を前に戦間期の行動主義——フライヤーは「行動派 (Tatkreis)」に属していた——をたしかに断念しており、文化的ペシミズムを再度、取り上げていた」(Kießling 2012: 326) のである。

これに対して、ポロックもハーバーマスも、ユートピアへの展望を確保しようとする。ポロックは、オートメーションへと至る技術の発展とディストピアの到来との関連を相対化する。ポロックは、上述のように、オートメーションがディストピアをもたらす可能性を認めながらも、逆にそれがユートピアをもたらす可能性を析出し、オートメーションの導入を推進する立場を確保しようとする。ハーバーマスは、オートメーションへと至る技術の発展と合理化との関連を相対化する。ハーバーマスは、オートメーションのディストピアを招来する「技術的処理力」の拡張としての合理化とは異なる、もうひとつの合理化の可能性を模索し、合理主義の立場を確保しようとする。

ここでハーバーマスは、理性概念の再構成へと向かう。彼は、「技術的処理力」の拡張としての合理化の根源に、「理性と決断の実証主義的隔離」を発見する (Habermas 1963c: 365-72)。この「隔離」では、技術的課題だけが、つまり所与の目的や目標を実現する合理的な手段の選択だけが、理性の管轄となる。「目的合理的な手段選択の経済だけが唯一許容された「価値」であり、それすらも合理性と一致するように見えるから、価値として明瞭な姿をとることはないだろう」(Habermas 1963c: 241=1999: 366)。技術的課題以外の課題は、理性の管轄から外れる。とくに、実践的問題は、つまり何を目的にするかという決断は、理性の管轄外に置かれる。この問題を理性の対象にしようとする、独断論に陥る。「実証主義によって唯一許容される科学の類型はそうした問題を合理的に論究する性能を持たない。それにもかかわらず、解答を提示する理論は、その基準にしたがって独断論の罪を着せられうる」(Habermas 1963c: 241=1999:367)。何を目的とするかという決断は、理性の制約をまったく受けない、たんなる

決断へと還元される。独断論との非難から免れる方法は、決断を理性から切り離すことになる。「独断論による破門から解放されるための呪文は、理性から嚴重に隔離された決断である」(Habermas 1963c: 241=1999: 367)。「技術的处理力」の拡張としての合理化の第一段階を思い起こそう。それは、目標の実現のために可能な合理的な行動の観点から行動が選択される段階であり、目標は所与とされている。それはまさに、「理性と決断の実証主義的隔離」に基づいている。

決断を管轄外に置き言わば外部へと追放する理性、これがオートメーションのディストピアの根源にあるなら、あえて決断を内に含むものとして、より一般的には非理性的なもの——その極致は「狂気 (Wahnsinn)」であろう——を内に含むものとして、理性概念を再構成することが、処方箋となろう。ハーバーマスは、「独断論・理性・決断」の最終パラグラフで、博士論文「絶対者と歴史」でテーマとし、「唯物論への移行における弁証法的観念論」(1963年)で再論する、シェリングに依拠する。シェリングは、「規制された狂気」として理性を捉えるからである。「規制された狂気としての理性というシェリングのロマン主義の言葉は、技術が支配するために理論から切り離された実践に対する、技術の支配のもとで、胸が締め付けられる思いがするほどに切迫した意味を獲得する」(Habermas 1963c: 256=1999: 389)<sup>13</sup>。

「マルクス主義的シェリング」の地平には、以上のような議論がある。では、「マルクス主義的シェリング」を、まさにこの地平のうちに捉え直し読み直すと、ブロッホ批判はどのようなものとしてあらわれるか。次にこの点を見てみることにしよう。

#### 4. 規制された狂気／知ある希望

ブロッホは『希望の原理』で、次のように述べる。「理性は希望なしには花開くことができない。希望は理性なしに語ることができない。理性と希望は、マルクス主義的統一のもとにある。それ以外の科学に未来はない。他の未来に科学はない」(Bloch [1959]2019: 1618=2013: 311)。ハーバーマスは、「マルクス主義的シェリング」の冒頭で、この文章を引用し、次のように指摘する。「これは——『痕跡』や彼自身の好みにかかわらず——、自らの強みを短い形式で、アフォリズムや寓話で、必ずしも示さなかった叙事詩的思想家の数少ないエピグラムのひとつである」(Habermas 1963d: 336=1999: 509)。

この指摘に見られるように、そして何より論文タイトルにあるように、ハーバーマスにとってブロッホは「マルクス主義的シェリング」である。すなわち、「理性は希望なしには花開くことができない。希望は理性なしに語ることができない」として「知ある希望 (docta spes)」を構想するブロッホに、「規制された狂気」というシェリングの理性概念が見出される<sup>14</sup>。希望の「根本的要素」に「飢え (Hunger)」があるかぎりである (Habermas 1963d: 336=1999: 510)、希望は「狂気」であり、「知ある希望」は「規制された狂気」である。また同時に、この「知ある希望」において提示されるユートピアとして「自由の王国」を措定するブロッホに、マルクスが見出される。

この意味で「マルクス主義的シェリング」であるブロッホが取り組もうとした課題について、

ハーバーマスは次のように述べる。「いっそう大きな危険は、彼の陣営で「引用句辞典を手にした画一主義者」や「物欲しげな実務家」がユートピアを実現しようとするあまりユートピアを裏切ることにあるが、この危険はいっそう大きな努力を要求しているようにブロッホには見える。すなわち、ユートピアの諸次元それ自体を捉え、それらが失われることのないように後世の人々のために保持するという努力である」(Habermas 1963d: 337=1999: 511)。ハーバーマスはここで、現実の社会主義が「自由の王国」への希望を裏切っていく事態を前に、この希望の保存に努めようとするブロッホの姿を確認していると言えよう。

このように理解されたブロッホは、ハーバーマスにとって否定すべき対象では必ずしもないはずである。それは、「独断論・理性・決断」を議論の地平に措定すると、明確となる。前節で確認したように、ハーバーマスは、オートメーションのディストピアの根源に実証主義的に純化された理性を発見し、理性をあえて非理性的なものを内に含んだものとして、シェリングにならって「規制された狂気」として概念化しようとしていた。そうであるなら、シェリングの理性概念に依拠する点において、ブロッホはむしろ肯定されなくてはならないだろう。

また、「規制された狂気」としての理性を「知ある希望」へと展開する点も、肯定されるだろう。技術的勧告にとどまらない実践的指針の提示を課題とする「批判的社会学」の構想は、まさに「知ある希望」の提示を課題とする社会学の構想である。また実際、『公共性の構造転換』では、「市民的公共性」が「知ある希望」として提示されたのであった(Habermas [1962]1990=1994)。

さらに、ブロッホが「自由の王国」への希望の保存に努めようとした点も、理解されうだろう。DDR とその後見人ソビエト社会主義連邦共和国(UdSSR)の現実に、またそのなかでブロッホが置かれていた状況に、想像が及ばなかったはずはない。

このように、ハーバーマスにとってブロッホは否定すべき対象では必ずしもない。かえって決定的な点——「規制された狂気」として理性を概念化する点——において、共通の立場に立脚する。実際、ハーバーマスは、メルクア誌に掲載された「マルクス主義的シェリング」の末尾で、ブロッホへの評価を込み入った表現で吐露する。「そうだとしても、今日、アングロサクソンの実証主義とソビエトの唯物論との間にあってごく狭い空間でひしめきあっている、ヨーロッパの残された伝統に依拠する哲学者にとって、次の事態は痛に障る。すなわち、ドイツ観念論の偉大な息吹によってもたらされた哲学が——言うなれば省略されたカントを対価に、ある意味では前批判的に——エルベ川の向こうから対抗するという事態である」(Habermas 1960: 1091) <sup>15</sup>。

ブロッホに対する厳しい批判は、共通の立場に立脚するからこそ生じたと考えるべきであろう。「独断論・理性・決断」を地平に「マルクス主義的シェリング」を読み直すと、ブロッホ批判はこのような屈折をともなったものとしてあらわれる。

しかし、共通の立場に立脚するなら、批判された事態——暴力の容認傾向——は、エルベ川の対岸の火事ではありえない。この事態をもたらした思想的契機を析出し除去し、それに代替するものを用意しなければならない。次に、ハーバーマスがこの思想上の手術をどのように行おうとしているのか、再構成しよう。



## 5. 思弁的な哲学／自然哲学

「マルクス主義的シェリング」で、ハーバーマスはユートピアが実現可能性に欠けるならば、たんに主観的なものになることを、かえってブロッホに依拠しながら、問題視する。「しかし、より良い生活への夢は何にせよ、その先取りがまずは歴史の中に潜勢力としてあらわれなければ、「内面的なまったく謎めいたままに孤立した飛び地へと押し込められる」だろう」(Habermas 1963d: 344=1999: 522)。

ユートピアを提示するとき、その実現可能性をチェックすることが重要となる。ユートピアは具体的ユートピアとして提示されなくてはならない。ハーバーマスは、この点をトマス・モアに遡って、次のように確認する。「トマス・モアの「ユートピア新島」がそれ[実現されるべき真理——引用者注]にこの名をつけて以来、歴史的発展および社会的駆動力の分析がその可能な実現の諸条件を明らかにし始めるにいたってようやく、ユートピアは具体的ユートピアへと展開することができた」(Habermas 1963d: 337=1999: 511)。

ここで、ブロッホはユートピアの実現可能性の重要性に思い至っていないと批判されるわけではない。この重要性を説いたのは、むしろブロッホであった。ブロッホは、「計画を備え、期限を迎える可能性に結びついた希望は、何といても、存在するもののなかで最強にして最善である」(Bloch [1959]2019: 1618=2013: 310) と言うことができたのである。ハーバーマスは、ブロッホによってブロッホを批判する。批判は、ブロッホが自ら課した条件を履行していないことに向けられる。ブロッホは、「歴史的発展および社会的駆動力の分析」を怠っている。彼は、それを「史的唯物論」によってすでに終わっているとする。「そうした分析に、ブロッホは取り組んでいない。ブロッホは、かかる分析をすでになされたものとして、つまり史的唯物論によってなされたものとして、たんに想定する」(Habermas 1963d: 337=1999: 511)<sup>16</sup>。

ブロッホがこのように自ら課した条件を履行しないのは、なぜか。ハーバーマスは、その理由をブロッホが自然哲学に準拠していることに見出す。「自然の哲学が彼の哲学の本性である」(Habermas 1963d: 351=1999: 532)。歴史や社会を飛び越えて自然が問題となる。「ブロッホは、社会的過程から弁証法的に押し出されてくる客観的可能性を社会学的・歴史的に探究することを飛び越え、かえって世界過程における普遍的な基体それ自体を、すなわち物質を、ただちに引き合いに出す」(Habermas 1963b: 344=1999: 522)。

さらに、ハーバーマスは、このようにブロッホが自然哲学に準拠することの背景に、彼がなお思弁的であることを見る。ブロッホは、自らが社会の歴史的過程に内属していることを、それゆえに現存する諸矛盾の経験を軽視し、「ポテンツ」を思弁する。「ブロッホの唯物論は、なお思弁的であり、彼の啓蒙の弁証法は弁証法を超えて、ポテンツ論に前進する」(Habermas 1963d: 351=1999: 532)。

ハーバーマスからすると、ブロッホは思弁的であるがために自然哲学に準拠し、ユートピアを歴史的・社会的水準ではなく自然的・物質的水準で捉えるために、その実現可能性のチェックをなおざりにする。ここで、ブロッホのユートピアは、実現可能性を欠く場合には、妥当性

を欠くものとして反駁されるものではなくなる。それは絶対化される。「彼は、ユートピアのたんなる実験的な妥当性も削除する」(Habermas 1963d: 350=1999: 530)。ここに、ユートピアが神聖化され、その実現の手段として暴力の許容される余地が生じる。ブロッホは、思弁的であるがゆえに、十分に「知ある」「希望」を、十分に「規制された」「狂気」を、提示することができない。結果、「狂気」に足を掬われ、暴力を容認する傾向に陥る。ハーバーマスには、このようにブロッホがあらわれる。

事態がこのようなものであるなら、思弁を脱却し自然哲学を廃棄し、ユートピアを歴史的・社会的水準で捉えること、そして、実現可能性のチェックをなおざりにせず神聖化の余地を与えないことが重要となる。ハーバーマスは、世界に内属することを自覚し、むしろ積極的にそれを引き受けること、すなわち現存する諸矛盾の経験に準拠し、この矛盾に発する要求の実現を目指す実践の契機となることを求める。そのうえで、その要求(=ユートピア)が、客観的な要求であり、またその充足が客観的に可能であることの確認を要請する。「ユートピアはその止揚の実践的必然性を現存する諸矛盾の経験から理論的に把握しようとするなら、その認識を導く関心を科学的に二重の観点から正当化してもらわなければならない。すなわち、現実的に客観的な要求として、その充足が客観的に可能なものとして、正当化してもらわなければならない」(Habermas 1963d: 350=1999: 530)。

こうして、ユートピアの提示は、それを歴史的・社会的水準で捉えたうえで、その実現可能性をチェックすることが要件となる。ここで、このチェックを担う学として、社会学があらわれる。戦後、連邦共和国において、社会学はアメリカ社会学の影響を受けて実証的な経験科学としての側面を強めていた。フランクフルト大学社会研究所もまた、その受容の一翼を担っていた。社会学は、「希望」を十分に「知ある」ものに、「狂気」を十分に「規制された」ものにする、鍵となる機能を担うものとしてあらわれる。初期ハーバーマスが社会学に準拠する理由は、ここにあったと考えられる。

ここからハーバーマスは、「批判的社会学」の構想へ向かった。この構想では、社会学は、外部から与えられたユートピアの実現可能性をチェックすることにとどまらず、それ自体でユートピアを提示し、その実現に向けて何がなお不足しているかを具体的に指摘することを課題とする。この社会学は、「現存する諸制度において要求される意味を真に受ける」(Habermas 1963b: 229=1999: 346)とされる。この社会学では、ユートピアは「現存する諸制度において要求される意味」として、まさに客観的な要求として、またその充足が客観的に可能なものとして、提示される。そのうえで、その実現にあたって何が不足しているかを、「意味」がなお実現していないものとして現実を批判的に捉え直すことで、明らかにするのである。

## 6. 戦後的理性と社会学

なぜ初期ハーバーマスは社会学に準拠するのか。この問いに対する本論の答えは、次のようになる。「希望」を十分に「知ある」ものに、「狂気」を十分に「規制された」ものにするためである。

戦後社会は、「狂気」を排除した純化された理性にも、この理性の否定にも、立脚することがもはや許されない社会であった。一方で、純化された理性に立脚することは、オートメーションのディストピアをもたらした。それだけではない。理性から排除されているために逆に理性に制約されない「狂気」の跳梁を許す。ハーバーマスもこの点を見逃していない。「狂気はそれゆえに規制を免れざるを得ない」(Habermas 1963c: 257=1999: 389) のである。他方で、純化された理性の否定に立脚することも、「文明」に対する「文化」の対置が少なくとも部分的には国民社会主義へと転落していったように、この「狂気」に飲み込まれる。

諦念も魅力的な選択肢とはならない。アドルノをはじめとする、フランクフルト学派やその周辺に集った人々は、国民社会主義を生み出した啓蒙の自己破壊を見据えながらも、希望を語ることを決してやめようとはしなかった。出口剛司は、「何故そこまでしてフロムは、そしてアドルノは希望を語り続けたのであろうか」(出口 1997: 195) と問いかけたうえで、その理由を次のように解説する。「希望の効果とは、希望と絶望の循環のなかで絶望を薄め、無化すること」にあり、「希望が完全に消去される瞬間に新たな指導者 (Führer) が姿をあらわす」からであると(出口 1997: 195)。希望は語られ、ユートピアは提示されなければならない。諦念に立ち止まってはならない。

初期ハーバーマスが直面していた状況は、こうしたものであった。ここで、「規制された狂気」として理性を概念化し、そこに立脚することが、戦後社会でなお歩みうる道としてあらわれる。しかし、「規制された狂気」は、「狂気」によって容易に内側から転覆されうる。ハーバーマスは、ブロッホにこの転覆の危険を見てとる。ここで、社会学は、この転覆を防止する、鍵となる機能を果たすものとして発見される。初期ハーバーマスにおいて、社会学は戦後の理性の可能条件としてあらわれたのである。

\*本研究は JSPS 科研費 JP18K02041 の研究成果の一部である。

## 註

- 1 このような状況のなかでも、泉啓は、初期ハーバーマスの思想を集中的に論じ、その核心を「秩序の未完性の理解」として析出したうえで、それを基礎にハーバーマスの理論展開全体の再構成を試みている(泉 2011)。また、ローマン・ヨースは、1952年にフランクフルト一般新聞 (Frankfurter Allgemeine Zeitung) に掲載された「ゴットフリート・ベンの新しい声」から62年の『公共性の構造転換』までの「若きハーバーマス」思想の生成・展開過程を、「理念史的 (ideengeschichtlich)」立場から詳細に再構成している (Yos 2019)。
- 2 飯島 (2008) は、連邦共和国における「自由で民主的な基本秩序」の問い直しを、スカーフ論争を通して浮かび上がらせる試みとなっている。
- 3 この点に関して、とくに『公共性の構造転換』のアクチュアリティについては飯島 (2019) を参照。
- 4 「マルクス主義的シェリング」が『理論と実践』の新版に収録されなかったことは、その成立の文脈を曖昧にする結果となり、その解釈を難しくしている。ただし、日本語訳では、「この訳書はこの移動 [原著新版刊行にともなう収録論文の移動——引用者注] に全面的に対応する余裕がなかった」(細

谷 [1975]1999: 627) ことが幸いして、そのまま収録されている。

- 5 以下のブロッホの伝記的事実については好村 (1986) を参照した。
- 6 ハーバーマスの、連邦共和国の知識人に対するブロッホの好戦的な姿勢にも批判的に言及している。

「いずれにせよブロッホは気安く攻撃的に論争を仕掛ける。こちら側の文芸欄は正義の証明書付きで仕返しをすることができた」(Habermas 1963d: 348=1999: 528)。しかし同時に、ハーバーマスは、この点は本質的ではないことにも注意を促している。「しかし、日々の政治のレベルで告発することや、ブロッホを、つまりグノーシス主義者を、神学的彼方へと遠ざける、それと補完的な試みも、この哲学がその政治的な根を下ろしている次元の探求を躊躇してはならないだろう」(Habermas 1963d: 348=1999: 528)。
- 7 本論では、既存の邦訳を参照した場合には訳書のページ数を記載する。ただし、本論の文脈に合わせて原書からあらためて訳出している。
- 8 ヨースによると、「全体主義的なもの (Totalitäres)」はメルクーア誌に掲載される前段階では「ファシズム (Faschismus)」となっておりさらに強い表現となっていたが、メルクーア誌とブロッホとの間での議論を受けて、変更された (Yos 2019: 454-5)。
- 9 ブロッホからすると、ハーバーマスの批判には『希望の原理』への無理解を感じざるを得なかっただけでなく、裏切られた思いもあったようである。ヨースによると、メルクーア (Merkur) 誌への書信で、「ブロッホは、ハーバーマスが悪意に満ちた論争を背後から——『希望の原理』にまともに耳を傾けることなく——仕掛けてきたと嘆くだけでなく、とくに「ファシズム (Faschismus)」という言葉の使用に対して抗議した」(Yos 2019: 455)。「ファシズム (Faschismus)」の言葉の使用については、註 8 も参照。
- 10 実際、同書旧版の「序言」には、「付録には、三篇のすでに発表されたことがある論文が収録されている。これらの論文は、本文では説明されていないテーゼを解説するものである」(Habermas 1963a: 7=1999: 1) とある(「三篇」とは、「マルクス主義的シェリング」に加えて、「マルクスとマルクス主義についての哲学的討論に寄せて」と「カール・レーヴィットによる歴史的意識からのストア的退却」である)。ただし、この文言は新版の「第一版序言」では削除されている。シェリング論とレーヴィット論が『哲学的・政治的プロフィール』に転載され、新版には収録されなかったことに対応する措置であろう。
- 11 本論は、「マルクス主義的シェリング」を『理論と実践』における理論構想の補遺として位置づける。これに対して、ヨースは、同論文を『公共性の構造転換』に結実する、公共性の理論の構築過程に位置づける。ヨースは、「マルクス主義的シェリング」を「民主主義の理念」——政治と公共性」と題された章に配置された「公開性を通しての政治の合理化」(Yos 2019: 442-74) のもとで論じる。ここでヨースは、「マルクス主義的シェリング」を、ラインハルト・コゼレックおよびハンノ・ケスティングを批判した「悪名高い進歩／誤認された世紀——歴史哲学への批判に寄せて」に並行した論文として解釈する(ヨースは両論文が 1960 年 5 月と 11 月にメルクーア誌に相次いで掲載されたことに注意を促している)。ヨースによると、ハーバーマスは「政治的行為の形態 (Form)」の問題に対してブロッホが「全体主義的、コゼレックおよびケスティングが「決断主義的」と特徴づけられる立場を提示したとする。ヨースは、「民主主義の理念」に必ずしも忠実ではないブロッホを問題にする

ハーバーマスを発見する。「この行為 [ブロッホが歴史的出来事を中心に置いた人間の行為——引用者注] は、その基準が貫徹の可能性の問いにのみ方向づけられるがために、社会的に正当化された基準なしに存立し、したがって民主主義の理念に斜に構える」(Yos 2019: 458)。そのうえで、ヨースは、ハーバーマスには、「歴史哲学に埋め込まれた、彼自身の政治哲学のバージョンをテストする具体的機会が、1960年秋の第6回ドイツ哲学会議で開かれることになった」(Yos 1999: 458)とし、『公共性の構造転換』にいたる理路を再構成しようとする。

- 12 『オートメーション』は、アドルノとヴァルター・ディルクスによって編集された「社会学に対するフランクフルターの貢献 (Frankfurter Beiträge zur Soziologie)」シリーズの第5巻として刊行された。オイゲン・コーゴン等と Frankfurter Hefte 誌を創刊したことで知られるディルクスは当時、社会研究所でも活動していた。
- 13 ハーバーマスの理論構築に対するシェリングの影響については、ヨーゼフ・クラーツが先駆的で体系的な議論を展開している (Keulartz 1995)。また、とくに『公共性の構造転換』への影響については飯島 (2019) を参照。
- 14 ヨースは、ブロッホが自然哲学に依拠する点にハーバーマスは注目して、ブロッホを「シェリング」と規定していると解釈する。「自然の荒廃が未来に解決されることをすっかりあてにする「未だないもの」において、また世界過程にある種のポテンツとしてあらわれる「世界霊魂として物質」を際立たせることにおいて、ブロッホはシェリング哲学と密接な関係があることを示すとされる」(Yos 2019: 456)。この解釈もまた、可能であろう。ハーバーマスがブロッホを「マルクス主義的シェリング」と規定した際の「シェリング」の意味は、二重であったと考えられる。
- 15 この文章は『理論と実践』の収録時に削除された (『哲学的・政治的プロフィール』では、メルクーア誌に掲載されたバージョンに準拠しているため、復活している)。ブロッホの連邦共和国への亡命に対応した措置であろう。しかし、これによってブロッホに対する否定的評価がより強調される結果となっており、論文の解釈を難しくしていると思われる。
- 16 クラーツもこの点に注目する。クラーツは、ハーバーマスのブロッホ批判をマルクス主義批判の文脈に位置づける。ハーバーマスは、マルクスの政治経済学批判に否定的となり、「この約束 [解放の約束——引用者注] が果たされるという希望に今や強調点は置かれる」とし、「この強調点の移動は、エルンスト・ブロッホの影響のもとでなされる」とする (Keulartz 1995: 137)。そのうえで、「そのような構想 [具体的ユートピアの構想——引用者注] の生存能力 (Lebensfähigkeit) を証明するために、イデオロギー批判者 [ブロッホもここに分類される——引用者注] は社会的発展の科学的分析に関わらなければならない」にもかかわらず、「ブロッホにはこの経験的なコントロールが欠けている」ことが批判されたとする (Keulartz 1995: 138)。さらに、「ブロッホはそのうえ近代意識の形態の手前で不当に立ち止まる、つまりヘーゲルのように擬古典主義の美学とその中心的な概念である象徴になお固執する」(Keulartz 1995: 138) ことが問題にされたとする。ここでは、「アレゴリーの概念」を駆使する、ヴァルター・ベンヤミンさらにアドルノが評価されたが、ハーバーマスにとっては、アドルノも不十分であり、独自の歴史哲学の構築に向かったとされる (Keulartz 1995: 138-9)。こうしたクラーツの議論に対して、本論は、ハーバーマスのブロッホ批判を、マルクス主義批判ではなく実証主義批判の文脈に位置づける。そのうえで、それを暴力容認傾向に対する批判を中心とした

ものとして解釈する。本論は、「経験的なコントロール」の欠如が批判されたのは、ユートピアの「生存能力」ではなく、ユートピアを提示し希望を語ることに潜在する暴力が、問題にされたからだと考える。また、ハーバーマスの批判の矛先は、ブロッホの美学的立場よりも哲学的立場に向けられたと考える。なお、ヨースは、上述のようにクラーツが「強調点の移動」をブロッホの影響に帰すことについて、「疑わしい」とする (Yos 2019: 367)。

#### 引用文献

- Bloch, Ernst, [1959] 2019, *Das Prinzip Hoffnung*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (山下肇・瀬戸鞏吉・片岡啓治・沼崎雅行・石丸昭二・保坂一夫訳, 2012-3『希望の原理』白水社.)
- 出口剛司, 1997, 「守られない約束・希望へのまなざし——フロム疎外論と〈希望〉」『ソシオロギス』21: 183-99.
- Habermas, Jürgen, 1960, “Ein marxistischer Schelling: Zu Ernst Blochs spekulativem Materialismus,” *Merkur*, 153: 1078-91.
- , [1962]1990, *Strukturwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*, Frankfurt am Main, Suhrkamp. (細谷貞雄・山田正行訳, 1994, 『公共性の構造転換——市民社会の一カテゴリーについての探求』未來社.)
- , 1963a, “Vorwort,” *Theorie und Praxis: Sozialphilosophische Studien*, Neuwied am Rhein und Berlin: Luchterhand, 7. (細谷貞雄訳, 1999, 「序言」『〔新装版〕理論と実践——社会哲学論集』未來社, 1.)
- , 1963b, “Kritische und konservative Aufgaben der Soziologie,” *Theorie und Praxis: Sozialphilosophische Studien*, Neuwied am Rhein und Berlin: Luchterhand, 215-30. (細谷貞雄訳, 1999, 「社会学の批判的課題と保守的課題」『〔新装版〕理論と実践——社会哲学論集』未來社, 327-51.)
- , 1963c, “Dogmatismus, Vernunft und Entscheidung: Zu Theorie und Praxis in der verwissenschaftlichten Zivilisation,” *Theorie und Praxis: Sozialphilosophische Studien*, Neuwied am Rhein und Berlin: Luchterhand, 231-57. (細谷貞雄訳, 1999, 「独断論と理性と決断——科学化された文明における理論と実践のために」『〔新装版〕理論と実践——社会哲学論集』未來社, 353-91.)
- , 1963d, “Ein Marxistischer Schelling: Zu Ernst Blochs spekulativem Materialismus,” *Theorie und Praxis: Sozialphilosophische Studien*, Neuwied am Rhein und Berlin: Luchterhand, 336-51. (細谷貞雄訳, 1999, 「マルクス主義的シェリング——エルンスト・ブロッホの思弁的唯物論によせて」『〔新装版〕理論と実践——社会哲学論集』未來社, 509-33.)
- 細谷貞雄, [1975]1999, 「改版のあとがき」ユルゲン・ハーバーマス (細谷貞雄訳)『〔新装版〕理論と実践——社会哲学論集』未來社, 627-8.
- 飯島祐介, 2008, 「スカーフ論争とドイツの規範的自己理解の現在」『社会学評論』59(3): 551-65.
- , 2019, 「J・ハーバーマス『公共性の構造転換』のシェリング主義的基礎——「進歩の消滅」のもとで実践的であることの可能性」『社会学史研究』41: 59-75.

- 泉啓、2011、「ハーバーマスにおける秩序の未完性の理解——同時代史を背景とした考察」（東北大学大学院文学研究科人間科学専攻博士学位論文）。
- Keulartz, Jozef, 1995, *Die verkehrte Welt des Jürgen Habermas*, Hamburg: Junius.
- Kießling, Friedrich, 2012, *Die undeutschen Deutschen: Eine ideengeschichtliche Archäologie der alten Bundesrepublik 1945-1972*, Paderborn: Ferdinand Schöningh.
- 好村富士彦、1986、『ブロッホの生涯——希望のエンサイクロペディア』平凡社。
- Pollock, Friedrich, 1956, *Automation: Materialien zur Beurteilung der ökonomischen und sozialen Folgen*, Frankfurt am Main: Europäische Verlagsanstalt.
- Yos, Roman, 2019, *Der junge Habermas: Eine ideengeschichtliche Untersuchung seines frühen Denkens 1952-1962*, Berlin: Suhrkamp.